

## 第4章 1次写像と2次形式

### 4.1 1次写像

座標平面上の各点  $P(x, y)$  にある点  $P'(x', y')$  を対応させているとしよう。この対応を平面から平面への**写像** mapping という。これを記号  $f$  を用いて、

$$f : (x, y) \mapsto (x', y') \quad \text{または} \quad P' = f(P)$$

のように表わす。点  $P'$  を変換  $f$  による点  $P$  の**像** image という。点  $P, P'$  の位置ベクトルをそれぞれ

$$\vec{p} = \overrightarrow{OP} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \quad \vec{p}' = \overrightarrow{OP'} = \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix}$$

で表わすと、この写像はベクトル  $\vec{p}$  をベクトル  $\vec{p}'$  に対応させる写像とみることもできる。このとき、同じ  $f$  を用いて  $\vec{p}' = f(\vec{p})$  と表わす。

写像  $f$  によりベクトル  $\vec{p}$  が  $\vec{p}'$  に移され、さらに写像  $g$  により  $\vec{p}'$  が  $\vec{p}''$  に移される時、

$$\vec{p}'' = g(\vec{p}') = g(f(\vec{p}))$$

となる。このとき  $\vec{p}$  を  $\vec{p}''$  に対応させる写像を  $f$  と  $g$  の**合成写像** composite といい、 $g \circ f$  で表わす。すなわち

$$(g \circ f)(\vec{p}) = g(f(\vec{p}))$$

である。

点  $P$  をそれ自身  $P$  に対応させる写像は**恒等写像** identity mapping といい、 $i$  で表わす。

変換  $f, g$  について、合成変換  $g \circ f$  と  $f \circ g$  が共に恒等写像  $i$  になるとき、 $g$  を  $f$  の**逆写像** inverse mapping といい、 $f^{-1}$  で表わす。すなわち、 $f(\vec{p}) = \vec{p}'$  のとき、 $f^{-1}(\vec{p}') = \vec{p}$  である。

平面上のベクトルを平面上のベクトルへ移す写像

$$f : \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} \quad \text{または} \quad \vec{p}' = f(\vec{p})$$

において、 $x', y'$  が  $x, y$  の一次式

$$\begin{cases} x' = ax + by \\ y' = cx + dy \end{cases} \quad (a, b, c, d \text{ は定数})$$

で表わされるとき、写像  $f$  を**線形写像**または**1次写像** linear mapping という。この式は行列を用いて

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax + by \\ cx + dy \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

と書けるので、一次写像は

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \quad \text{ただし、} \quad A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$$

で表わされる。行列  $A$  を一次写像  $f$  を表わす行列という。また  $f$  を行列  $A$  の表わす1次写像という。

$f$  が1次写像ならば、任意のベクトル  $\vec{p}, \vec{q}$  と実数  $k$  について

$$f(\vec{p} + \vec{q}) = f(\vec{p}) + f(\vec{q}), \quad f(k\vec{p}) = kf(\vec{p})$$

逆に、この2式を同時にみたす写像  $f$  は1次写像になる。

証明 1次写像  $f$  を表わす行列を  $A$  とする。任意のベクトル  $\vec{p}, \vec{q}$  と実数  $k$  について、

$$f(\vec{p} + \vec{q}) = A(\vec{p} + \vec{q}) = A\vec{p} + A\vec{q} = f(\vec{p}) + f(\vec{q})$$

$$f(k\vec{p}) = A(k\vec{p}) = k(A\vec{p}) = kf(\vec{p})$$

逆に、この2式を同時にみたす変換  $f$  について、 $\vec{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \vec{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  の像を

$$f(\vec{e}_1) = \begin{pmatrix} a \\ c \end{pmatrix}, f(\vec{e}_2) = \begin{pmatrix} b \\ d \end{pmatrix} \text{ とすると、} \quad \vec{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2 \quad \text{の像} \quad f(\vec{p}) = \vec{p}' = \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} \text{ は}$$

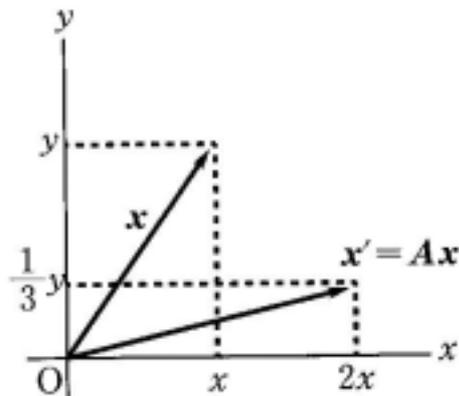
$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = f(x\vec{e}_1 + y\vec{e}_2) = f(x\vec{e}_1) + f(y\vec{e}_2) = xf(\vec{e}_1) + yf(\vec{e}_2) = x \begin{pmatrix} a \\ c \end{pmatrix} + y \begin{pmatrix} b \\ d \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} ax+by \\ cx+dy \end{pmatrix}$$

であるから、 $f$  は一次写像である。(終)

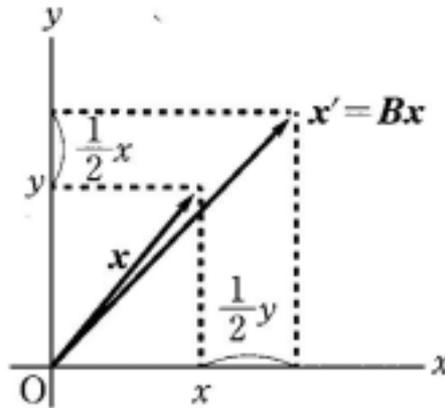
平面的ベクトル  $x$  に  $x'$  を対応させる1次写像  $x' = Ax$  を図で示そう。

まず、 $A$  が対角行列、例えば  $A = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & \frac{1}{3} \end{pmatrix}$  のとき、 $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 2 & 0 \\ 0 & \frac{1}{3} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  から  $\begin{cases} x' = 2x \\ y' = \frac{1}{3}y \end{cases}$

であるので、行列  $A$  は  $x$  軸方向に2倍に拡大し、 $y$  軸方向に  $\frac{1}{3}$  倍に縮小する写像を表わしている。



また,  $B = \begin{pmatrix} 1 & \frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & 1 \end{pmatrix}$  のとき,  $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = B \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} x + \frac{1}{2}y \\ \frac{1}{2}x + y \end{pmatrix}$  であるから, 対応の様子は次の図  
 のようである.



恒等写像  $i$  を表わす行列は単位行列  $I = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$  である.

1次写像  $f, g$  について, 合成写像  $g \circ f$  も1次写像であり,  $f, g$  を表わす行列を  $A, B$  とすると,  $g \circ f$  を表わす行列は  $BA$  である.

1次写像  $f$  で逆写像をもつのは,  $f$  を表わす行列  $A$  が逆行列をもつ ( $A$  が正則) とときであり, そのとき逆写像  $f^{-1}$  を表わす行列は  $A$  の逆行列  $A^{-1}$  である.

証明 まず, 任意の  $\mathbf{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in R^2$  について,  $i(\mathbf{p}) = \mathbf{p} = I\mathbf{p}$  である. 次に,  $f, g$  が1次写像のとき, 任意のベクトル  $\mathbf{p}, \mathbf{q}$  と実数  $k$  について

$$\begin{aligned} (g \circ f)(\mathbf{p} + \mathbf{q}) &= g(f(\mathbf{p} + \mathbf{q})) = g(f(\mathbf{p}) + f(\mathbf{q})) \\ &= g(f(\mathbf{p})) + g(f(\mathbf{q})) = (g \circ f)(\mathbf{p}) + (g \circ f)(\mathbf{q}) \end{aligned}$$

$$(g \circ f)(k\mathbf{p}) = g(f(k\mathbf{p})) = g(kf(\mathbf{p})) = kg(f(\mathbf{p})) = k(g \circ f)(\mathbf{p})$$

であるから, 合成写像  $g \circ f$  が1次写像である. またその表わす行列は,

$$(g \circ f)(\mathbf{p}) = g(f(\mathbf{p})) = B(f(\mathbf{p})) = B(A\mathbf{p}) = (BA)\mathbf{p}$$

から,  $BA$  であることがわかる.

1次写像  $f$  が逆写像  $g$  をもつとき,  $g \circ f = i$  と  $f \circ g = i$  から  $g$  も1次写像であることを示す.

任意のベクトル  $\mathbf{p}', \mathbf{q}'$  とスカラー  $k$  について,  $g(\mathbf{p}') = \mathbf{p}, g(\mathbf{q}') = \mathbf{q}$  とおく. このとき,  $f(\mathbf{p}) = \mathbf{p}', f(\mathbf{q}) = \mathbf{q}'$  であり,  $f$  は1次変換だから

$$f(\mathbf{p} + \mathbf{q}) = f(\mathbf{p}) + f(\mathbf{q}) = \mathbf{p}' + \mathbf{q}', f(k\mathbf{p}) = kf(\mathbf{p}) = k\mathbf{p}'$$

従って,  $g(\mathbf{p}' + \mathbf{q}') = \mathbf{p} + \mathbf{q} = g(\mathbf{p}') + g(\mathbf{q}')$ ,  $g(k\mathbf{p}') = k\mathbf{p} = kg(\mathbf{p}')$  が成り立ち,  $g$  は1次写

像である。そこで、 $f$  と  $g$  の表わす行列をそれぞれ  $A, B$  とすると、 $AB = I = BA$  であることから、 $B = A^{-1}$  であり、 $g$  を表わす行列は  $A$  の逆行列  $A^{-1}$  であるといえる。(終)

点  $P(x, y)$  を原点のまわりに  $\theta$  だけ回転した点  $P'(x', y')$  に移す写像  $f_\theta$  は、次の線形写像で表わされる。

$$\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$

その逆写像  $f^{-1}$  は、原点のまわりの  $-\theta$  だけの回転である。即ち、 $f_\theta^{-1} = f_{-\theta}$  である。

また、 $f_{\alpha+\beta} = f_\beta \circ f_\alpha = f_\alpha \circ f_\beta$  がなりたつ。

証明 原点のまわりの角  $\theta$  だけ回転移動  $f_\theta$  が 1 次写像であることは、図を使って

$$f_\theta(\vec{p} + \vec{q}) = f_\theta(\vec{p}) + f_\theta(\vec{q}), \quad f_\theta(k\vec{p}) = kf_\theta(\vec{p})$$

を示すことで分かる。同じく  $\vec{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \vec{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  を回転すると  $\begin{pmatrix} \cos \theta \\ \sin \theta \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -\sin \theta \\ \cos \theta \end{pmatrix}$  である。

従って、先の証明から  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  の像は  $\begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  となる。

後半は意味を考えると明らかである。(終)

写像  $f: R^3 \rightarrow R^2$  (あるいは  $f: R^2 \rightarrow R^3$ ) が、任意のベクトル  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  と実数  $k$  について

$$f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}), \quad f(k\mathbf{x}) = kf(\mathbf{x})$$

を満たすとき、 $f$  を 1 次写像という。

$f: R^3 \rightarrow R^2$  が 1 次写像のとき、 $f$  を表す行列は  $2 \times 3$  型であり、 $f: R^2 \rightarrow R^3$  が 1 次写像のとき、 $f$  を表わす行列は  $3 \times 2$  型である。

写像  $f: R^3 \rightarrow R^3$  が任意のベクトル  $\mathbf{x}, \mathbf{y}$  と実数  $k$  について

$$f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}), \quad f(k\mathbf{x}) = kf(\mathbf{x})$$

を満たすとき、 $f$  を 1 次写像または空間  $R^3$  の 1 次変換という。 $f: R^3 \rightarrow R^3$  が 1 次写像のとき、 $f$  を表わす行列は  $3 \times 3$  型である。

写像  $f: R^2 \rightarrow R^1 = R$  や 写像  $f: R^3 \rightarrow R$  あるいは

写像  $f: R \rightarrow R^2$  や 写像  $f: R \rightarrow R^3$  もありえる。

写像が  $f: R^2 \rightarrow R^2$  のときは、同じ平面の写像だから、特に  $f$  は平面の **変換 transformation** という。同様に写像  $f: R^3 \rightarrow R^3$  は空間の変換という。これらの変換が 1 次写像であれば、**1 次変換** または **線形変換** という。単位変換、逆変換、合成変換という用語も同様に使おう。

例えば

写像  $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto x$  は空間の点の  $x$  軸への正射影である 1 次写像である。

写像  $f: x \rightarrow \begin{pmatrix} x \\ 2x \end{pmatrix}$  は  $R$  から  $R^2$  への1次写像である。

写像  $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  は空間の点の  $x$   $y$  平面への正射影である1次写像である。

写像  $f: \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ y \\ x+y \end{pmatrix}$  は  $x$   $y$  平面の点を空間の点へ移す1次写像である。

変換  $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ y \\ -z \end{pmatrix}$  は空間の点の  $x$   $y$  平面に関する対称移動である1次変換である。

変換  $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ -y \\ -z \end{pmatrix}$  は空間の点の  $x$  軸の周りの  $180^\circ$  回転である1次変換である。

変換  $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} -x \\ -y \\ -z \end{pmatrix}$  は空間の点の原点に関する対称移動である1次変換である。

変換  $f: \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \cos \theta - y \sin \theta \\ x \sin \theta + y \cos \theta \\ z \end{pmatrix}$  は空間の点の  $z$  軸のまわりの  $\theta$  だけの回転である。

平面上の変換  $f$  は点  $P$  を点  $P' = f(P)$  に移した。平面上のいろいろな図形  $G$  を点集合とみて、 $f$  による  $G$  の像  $G' = f(G) = \{f(P) \mid P \in G\}$  を考えることができる。

平面上の点を原点のまわりに  $\frac{\pi}{4}$  だけ回転する線形変換で、 $x$  軸は直線  $y = x$  に、双曲線  $x^2 - y^2 = 1$  は双曲線  $2xy = 1$  に移される。

$m, n, p, q$  は2または3であるとし、 $f: R^n \rightarrow R^m$ ,  $g: R^p \rightarrow R^n$ ,  $h: R^q \rightarrow R^p$  はそれぞれ1次写像であるとする。それらを表わす行列を順に  $A, B, C$  とすると、 $A$  は  $m \times n$  型、 $B$  は  $n \times p$  型、 $C$  は  $p \times q$  型である。合成写像  $f \circ g: R^p \rightarrow R^m$  を表わす行列は  $AB$  であり、合成写像  $g \circ h: R^q \rightarrow R^n$  を表わす行列は  $BC$  である。従って、等しい合成写像

$$(f \circ g) \circ h = f \circ (g \circ h): R^q \rightarrow R^m$$

を表わす行列  $(AB)C$  と  $A(BC)$  は等しい。

これは、行列の積の結合法則の自然な証明である。

$m, n$  は2または3とし,  $f: R^n \rightarrow R^m$  は1次写像とする.

$$\text{Im}(f) = \{f(\mathbf{x}) \mid \mathbf{x} \in R^n\} \quad (f \text{ の像 image という})$$

$$\text{Ker}(f) = \{\mathbf{x} \mid f(\mathbf{x}) = \mathbf{0}\} \quad (f \text{ の核 kernel という})$$

とおく.

$\text{Im}(f)$  は  $R^m$  の部分空間をなし,  $\text{Ker}(f)$  は  $R^n$  の部分空間をなす.

証明 任意の  $\mathbf{a}, \mathbf{b} \in \text{Im}(f)$  とスカラー  $k$  をとる.  $\mathbf{a} = f(\mathbf{x}), \mathbf{b} = f(\mathbf{y})$  を満たす  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in R^n$  が存在する.  $\mathbf{x} + \mathbf{y}, k\mathbf{x} \in R^n$  だから  $\mathbf{a} + \mathbf{b} = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}) = f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) \in \text{Im}(f)$  また  $k\mathbf{a} = kf(\mathbf{x}) = f(k\mathbf{x}) \in \text{Im}(f)$  をえる. これで  $\text{Im}(f)$  は  $R^m$  の部分空間であることが示された.

次に, 任意の  $\mathbf{x}, \mathbf{y} \in \text{Ker}(f)$  とスカラー  $k$  をとる.  $f(\mathbf{x}) = \mathbf{0}, f(\mathbf{y}) = \mathbf{0}$  だから,

$$f(\mathbf{x} + \mathbf{y}) = f(\mathbf{x}) + f(\mathbf{y}) = \mathbf{0} + \mathbf{0} = \mathbf{0} \quad \text{また} \quad f(k\mathbf{x}) = kf(\mathbf{x}) = k\mathbf{0} = \mathbf{0}$$

である. ゆえに  $\mathbf{x} + \mathbf{y}, k\mathbf{x} \in \text{Ker}(f)$  であり,  $\text{Ker}(f)$  は  $R^n$  の部分空間をなすことが示された.(終)

計算例 1次変換  $f: R^3 \rightarrow R^3$ ,  $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \mathbf{x}' = \begin{pmatrix} x+2y+3z \\ 4x+5y+6z \\ 7x+8y+9z \end{pmatrix}$  について  $f$  の像と核を

求めよう.  $f$  の表わす行列を  $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{pmatrix}$  とし, その  $A$  の第  $i$  列のベクトルを  $\mathbf{a}_i$  とおく

$$(i=1,2,3) \cdot \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = x\mathbf{e}_1 + y\mathbf{e}_2 + z\mathbf{e}_3 \quad \text{の像が} \quad f(\mathbf{x}) = xf(\mathbf{e}_1) + yf(\mathbf{e}_2) + zf(\mathbf{e}_3)$$

$= x\mathbf{a}_1 + y\mathbf{a}_2 + z\mathbf{a}_3$  より  $\text{Im}(f) = \{f(\mathbf{x}) \mid \mathbf{x} \in R^3\}$  は  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$  で張られる. ここで

$\mathbf{a}_3 = -\mathbf{a}_1 + 2\mathbf{a}_2$  であり,  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  は1次独立だから,  $f$  の像  $\text{Im}(f)$  は基底を  $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$  とする

2次元の部分空間である.

次に,  $A$  に行基本変形を行うと,  $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 4 & 5 & 6 \\ 7 & 8 & 9 \end{pmatrix} \rightarrow \dots \rightarrow B = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 0 & 1 & 2 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$  となるので

$$\begin{cases} x+2y+3z=0 \\ y+2z=0 \end{cases} \text{ を } z=t \text{ とおいて解くと } \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} t \\ -2t \\ t \end{pmatrix} = t \begin{pmatrix} 1 \\ -2 \\ 1 \end{pmatrix} \text{ となり, } f \text{ の核 } \text{Ker}(f)$$

は基底を  $\begin{pmatrix} 1 \\ -2 \\ 1 \end{pmatrix}$  とする 1次元の部分空間である.

2次の直交行列  $A$  で表わされる線形変換  $f$  を直交変換 orthogonal transformation という.

平面の1次変換  $f$  について, 次の条件は同値である.

$f$  は直交変換である.

$f$  はベクトルの大きさを変えない, 即ち,  $|f(\mathbf{p})| = |\mathbf{p}|$  である.

$f$  はベクトルの内積を変えない, 即ち,  $f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{q}) = \mathbf{p} \cdot \mathbf{q}$  である.

証明  $\Rightarrow \Rightarrow \Rightarrow$  の順に示す.  $f$  を表わす行列を  $A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$  とする.

$\Rightarrow$  :  $A$  は直交行列だから  ${}^tAA = E$  をみたすので

$$f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{q}) = A\mathbf{p} \cdot A\mathbf{q} = {}^t(A\mathbf{p})(A\mathbf{q}) = ({}^t\mathbf{p}{}^tA)(A\mathbf{q}) = {}^t\mathbf{p}({}^tAA)\mathbf{q} = {}^t\mathbf{p}E\mathbf{q} = {}^t\mathbf{p}\mathbf{q} = \mathbf{p} \cdot \mathbf{q}$$

即ち,  $f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{q}) = \mathbf{p} \cdot \mathbf{q}$  である.

$\Rightarrow$  :  $|f(\mathbf{p})|^2 = f(\mathbf{p}) \cdot f(\mathbf{p}) = \mathbf{p} \cdot \mathbf{p} = |\mathbf{p}|^2$  より  $|f(\mathbf{p})| = |\mathbf{p}|$  である.

$\Rightarrow$  :  $\mathbf{p} = \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$  について  $|f(\mathbf{p})| = |\mathbf{p}|$  とする.  $f(\mathbf{p}) = A\mathbf{p} = \begin{pmatrix} ax+by \\ cx+dy \end{pmatrix}$  だから

$$(ax+by)^2 + (cx+dy)^2 = x^2 + y^2$$

$$\therefore (a^2+c^2)x^2 + 2(ab+cd)xy + (b^2+d^2)y^2 = x^2 + y^2$$

これが任意の  $x, y$  について成り立つから

$$a^2+c^2=1, ab+cd=0, b^2+d^2=1$$

従って,  $A$  は直交行列であり,  $f$  は直交変換となる.

#### 練習問題 4.1

(1) 次の写像  $f$  は 1次変換か.

$$f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} x_2 \\ x_1 \end{pmatrix}$$

$$f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} x_1+x_2 \\ x_2 \end{pmatrix}$$

$$f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = x_1 x_2 \qquad f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} x_1 + 2x_2 - 1 \\ 3x_1 - x_2 + 2 \end{pmatrix}$$

(2) 次の線形変換を表わす行列を求めよ.

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 3x+2y \\ x-3y \end{pmatrix} \qquad f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 2y \\ -x \end{pmatrix}$$

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 3x+4y-z \\ x+y \end{pmatrix} \qquad f:\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x+y \\ y+z \\ z+x \end{pmatrix}$$

(3) 1次写像  $f: R^3 \rightarrow R^2$ ,  $x \mapsto Ax$  によって

$$\begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ -1 \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} -1 \\ -7 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} -2 \\ 4 \end{pmatrix}, \quad \begin{pmatrix} 2 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 5 \\ 13 \end{pmatrix}$$

となるとき, 行列  $A$  を求めよ.

$f$  を  $R^2$  からそれ自身への線形写像で,

$$f\left(\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} 3 \\ -4 \end{pmatrix}, \quad f\left(\begin{pmatrix} 1 \\ 3 \end{pmatrix}\right) = \begin{pmatrix} 0 \\ -3 \end{pmatrix}$$

を満たすものとする.  $f\left(\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}\right) = A\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix}$  と表現したときの行列  $A$  を求めよ.

ベクトル  $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 3 \\ 2 \\ 1 \end{pmatrix}$  をそれぞれ  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  に移す線形変換を表わす行列

を求めよ.

(4)  $R^2$  の線形写像  $f, g, h$  をそれぞれ

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x \\ 0 \end{pmatrix}, \quad g:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} 0 \\ y \end{pmatrix}, \quad h:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} y \\ x \end{pmatrix}$$

とする. 次の合成写像を求めよ.

$$f \circ g, \quad h \circ f, \quad h \circ g, \quad g \circ h, \quad h \circ h$$

(5) 次の1次変換の逆変換があればそれを求めよ.

$$f:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 3 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \qquad g:\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \mapsto \begin{pmatrix} x' \\ y' \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 & 2 \\ 2 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}$$